



星野道夫のアラスカ

雪崩となり私を襲う！

前回のタイトルに「アラスカの旅の始まり」と書いた。クルーズは終わったが、そこから私のアラスカの旅が始まったように思えるからだ。その理由はただ一つ、星野道夫に出会ったから。

アラスカクルーズの前に娘が送ってくれた八冊の本の中の一冊が星野道夫の「ぼくの出会ったアラスカ」だった。文庫本ということもあり、それほど特別な思いもなく、気軽にその

本を持って旅をした。アラスカという壮大な大自然を、四千人を超える人に乗せた豪華客船で妻と二人で堪能したが、ラスベガスがそのまま動くようなカジノあり、ショーあり、ディナーは毎晩、高級レストランのようなフルコースという旅であった。

神に感謝を捧げながら祈りと労働の生活を送るシスターたち。彼女たちは生涯、このような旅をすることは無い。せいたくな旅にふと罪の意識を持つ。それをごまかすかのよう

に旅先から二枚の絵葉書を送った。普段、カルメル会を訪れる時は気持ちばかりの差し入れをする。今回の旅を終えての訪問は罪の気持ちもあり、多少豪華な差し入れを持って行った。厚かましくも彼女たちの休憩時間に全員のシスターと面会室で会う。娘が送ってくれた



アラスカの写真集を持ってカルメル会を訪ねる

星野道夫の本も持参した。そこで意外な言葉を耳にした。「星野さんの写真集や著作集はここにもあります」

えっ、観想修道生活を過ごすカルメル会になぜ信仰に関係がない本があるのだろうか？ そういえばターシャの本もあった。彼女たちの祈りと共通する何かがあるのだろうか。エッセイ付写真集五冊を借りて帰った。

妻は一冊を読んで「借りて読む本ではない、買って手元に置きましょう」と言った。写真集だけでなく、写真家なのに写真が一枚もない著作集全五巻も求めた。

写真家・星野道夫、月曜の「走れ！おぼさん」の中村光子さんに

アラスカの話をしたら、私が言う前に「私、星野道夫が大好き。あの写真と文章はたまらない」と言われる。中学の教師をしている息子は「星野道夫は道徳の教科書にも出てくるよ」と後日、コピーを持って来た。副読本「きみがいちばんひかるとき」の目次に「悠久の自然・随筆」星野道夫・アラスカとの出会い」とある。

知らぬは私ばかり。大自然のアラスカとそこに生きる人や動物を愛し、そこで真剣に生きてきた星野道夫。彼が遺した写真と文章はすごい。生き方は全く異なるが、カルメリットがオーバ

星野道夫著作集 1
星野道夫著作集 2
星野道夫著作集 3
星野道夫著作集 4
星野道夫著作集 5

買い求めた星野道夫の本